平成 30 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

拉 加本

１．事業実施の目的

本事業実施の目的は、①現地におけるフィールド調査と②国際学会での研究発表の二つである。

２．実施場所

① 中国青海省海南チベット族自治州貴南県砂溝郷ボンコル村

② ロシアのサンクトペテルブルク大学

３．実施期日　　平成　30　年　7　月　10　日（　火　）から　9　月　10　日（　月　）

４．成果報告

●事業の概要

このたび、報告者は総合研究大学院大学（以下、総研大）の地域文化学専攻・比較文化学専攻学生海外派遣事業の支援を受け、最初は調査地の中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村に入り、7 月 10 日から 8 月 30 日にかけて、ボンコル村におけるラプツェ祭という山神の祭礼を巡ってボンコル村の移住史やダム建設、環境問題などについて詳細なフィールド調査を行った。その間、ラトン祭や「法の巡礼」(chos bskor)などボンコル村の夏季に行われている宗教的行事に積極的に参加し、調査研究を行った。その後、9 月 1 にロシアに赴き、サンクトペテルブルク大学にて開催された第 5 回「国際若手チベット学会」（The Fifth Meeting of the International Seminar of Young Tibetologists, ISYT2018、9 月 3 日～7 日）に参加し、これまで行ってきた調査データの一部を分析・考察し研究成果として発表した。

【調査について】

本調査では、中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村におけるアニェジュリ(a myes sgro ri)という山神の祠、すなわちボンコル村の人々がラプツェ・ドッパ（山神祭礼）と呼ぶラプツェ祭を中心に、ボンコル村で行われているラトン祭などの宗教的実践に関するあらゆる行事において参与観察、聞き取りなどの調査を実施した。具体的な調査内容は以下の通りである。（以下の日付はいずれも旧暦である）

ボンコル村の民間信仰という宗教実践においては、中国道教から伝来したアニェユラ神（文昌神）という重要な信仰対象があるが、まず旧暦 6 月 1 日（西暦 7 月 13 日）に、全村の人々がその外来神を祀る祭礼「ラトン祭」（lha ston）に参加した。龍羊峡ダムの建設（1976-1992）により、1986 年ボンコル村は一回ヴェレンタン（be len thang）というところへ移転せざるを得なかった。その年の 6 月 1 日に文昌神と廟も、ヴェレンタンから 5 キロ離れているナトック(sna thog)というところに移転することになり、以来、村の人々は文昌神の招待会を催し、そ

れをラトン祭と呼んで継続してきた。例年その日は、競馬、舞踊、弓術、民謡などが奉納されてきたが、近年の定住化政策などによりボンコル村のほとんどの世帯は放牧を辞めさせられ、出稼ぎなどのため村に人がいなくなっているため、年に一回しか行なわれないラトン祭にも大きな影響が出ている。特に今年のラトン祭では、競馬、舞踊、弓術、民謡などの奉納が一切行われなかった。祭礼では、祝詞を唱えながらサン供養を焚いて五体投地した後、廟に入ってアニェユラ神像の前（仏壇）におかれた鉢などに供養のセルキェム（酒）を入れ、廟の柱などにさまざまな色のカタックを付けた。廟内の礼拝が終えると、螺貝を吹きながらコラという廟を3回周る巡礼を行ってラトン祭が終わった。その後は廟の外で自由にグループを作って午後まで酒を飲んだりし、三々五々解散した。20数年前と比べると、ボンコル村のラトン祭には大きな変化が生じていることを観察できた。

写真 1 文昌神にセルキェム(酒)を捧げる(報告者撮影)

6月2〜3日、貴南県の町に近いリツァン寺（klu tshang dgon）ではカーラチャクラ塔(dus ’khor mchod rten)を建造することになり、それに収めるクー（sku）という多量の仏像(土で作った小さいな仏像)が、貴南県内のリツァン寺と関わる村全てにその彫刻と供出が依頼された。ボンコル村も2000個のクーを彫刻することになり、クーに金色で着色し、それに衣と五色の帯を巻くなどの作業を行った。クーは文珠菩薩、金剛手菩薩、観音菩薩という三部の仏（rigs gsum mgon po）、ターラー、カーラチャクラなどである。

リツァン寺のカーラチャクラ塔の建造はまだ完了してないが、報告者はボンコル村でのそれらの作業に参加することで、ボンコル村の人々が各自の家の仕事が多忙であるにも関わらず、宗教施設などに対する信仰を実践していること、ボランティアという形で村内外の宗教施設に対して様々な貢献をしていることを把握した。

写真 2,3 クーに色をぬり、衣と五色の帯を巻く作業（報告者撮影）

6 月 8 日、ボンコル村ではチェーコル（chos bskor）という宗教行事が行われた。毎年 6 月の第二の祝日（dus chen）、すなわち 8 日に行う行事と定めており、老若男女を問わず村全員を参加した。（月に８つの宗教的祝日がある。それらは、1 日、8 日、10 日、15 日、18 日、21 日、25 日、30 日である。30 日はチベット語でナムトン（gnam stong）と呼ばれる）チェーコルというのは、ボンコル村のマニ堂に保管されている大蔵経のカギュル（仏説部 104～8 巻）とテンギュル（論疏部 218 巻）の経典を村人が背負って、マニ堂からスタートしボンコル村の農耕地全体（一周約 13 キロ）を一周して戻るという儀礼である。一人 1 巻から 10 巻を背負ってチェーコルへ行くのであるが、１巻の重さは約 1 キログラムであり、経典の重さと自身の罪の重さを同じと見なすのである。ボンコル村の人々は、経典が重ければ、身(lus)、口(ngag)、意(yul)という三門（sgo gsum）から積まれた罪及び悪業も重いといい、経典などを背負って巡礼すること、つまり苦行することでその罪もなくせると考えている。それゆえ、夏の蒸し暑い日にわざわざ 15 巻以上を背負って行く人もいる。チェーコルの間ボンコル村の小学校が休校だったため、参加者の中に子供が多かった。他方、成人男性は出稼ぎなどのため 10 人にも満たなかった。

写真 4,5 ボンコル村のチェーコル（報告者撮影）

報告者は今年のボンコル村のチェーコルに参加することができ、その一部始終を撮影記録することができた。

6 月 18 日には、ラプツェ山のマポン（ma phongs）というところにおいてボンコル村の菩提塔の建造が開始し、7 月 18 日に完成した。塔の竣工式が、7 月 19 日のラプツェ祭に合わせて行われた。以下、この菩提塔の建造プロセスや目的、その背景にある歴史に関して少し述べたい。

仏塔はチベット語でチョルテン(mchod rten)と呼ばれ、「供養（チョル）・塔（テン）」及び「供養の対象」を意味する語である。インド仏教で仏舎利を納めたストゥーパ(stupa)、つまり仏陀を祀るために建設したのが起源とされている。チベットでは、化身ラマや歴代高僧の持ち物、衣、遺骨などを納めて建設された仏塔がよく見られる。

ボンコル村のこの菩提塔は、移住前にツァナ寺(tshal rnga dgon)で建造した（1944 年）ものであり、当時のツァナ寺の教師であった当該村出身の学僧ジエ・ドックリワ・ツルテムギャツォ(Rje ’brog ru ba tshul khrims rgya mtsho: 1895-1957)の指導で建造し、マラ・ツォワ(ツォワとは血縁関係を持つ親密な人間関係の社会集団)が施主となったという。当時、ボンコル村の各家から金銭ではなく、ラクダ、ヒツジ、ヤギ、ウシなどの家畜が布施されたという。仏塔建造において重要な役割を担ったマラ・ツォワのある一家では、男の子がセルトクジャ（gser tog rgyal,「仏塔の金冠」を意味する語）、女の子がチョルテンキ（mchod rten skyid,仏塔）といい、チョルテンの一部をとって命名されている事例が見られた。

1986 年、ダム建設の影響でツァナ寺はボンコル村内から離れ貴南県砂溝郷の隣に移転した。その後ボンコル村の元のツァナ寺付近に建設した菩提塔は再建されることがなかったが、ついに 2018 年 7 月に再建を見たのである。ボンコル村のラプツェ山（ラプツェを設置している所）

は、ダム湖で囲まれており、そのラプツェ山には中国国家保護２級の動物、チベットセッケイとバーラルなどの野生動物が生息する。また、隣の龍羊峡は青海省の１つの重要な観光地であり、年々訪れる国内外の観光客が増加している。最近、龍羊峡周辺の観光化計画が策定されはじめ、ボンコル村のラプツェ山も観光化計画内に含まれている。そのため、そこで放牧を行っている幾つかの家が強制移住させられたり、放牧業を制限されたりする恐れがあるのではと危惧されている。

仏塔建設の目的は、民衆の信仰の発露にとどまらず、ボンコル村の人々が自分たちの故郷を守るため、あるいはボンコル村の人々が古からこの土地の主であることを象徴的に表すために、アニェユラ廟、マニ堂、尼寺など村人が多く集まるところではなく、わざと人里と離れたラプツェ山山頂に建設することとなったと言われている。

報告者は、ボンコル村の仏塔建設に参加し、仏塔の構造や建設のプロセスを詳細に記述することができた。また、仏塔建設を通じて、村人の故郷に対する愛着、村内での一般庶民と村長の間の葛藤、また一般庶民の観光化政策に対する反対姿勢等々を観察することができた。

写真 6,7,8 ボンコル村の仏塔建造（報告者撮影）

7 月 19 日は、ボンコル村のラプツェ祭であった。ラプツェ、すなわち山神はアニェギュリという神である。ラプツェ祭礼は春の 4 月 11 日と秋の 7 月 19 日に、村の裏山で年二回行われている。本フィールド調査で参加できたのは、秋のラプツェ祭である。矢、矛、剣などを山頂に立つ山神の祠に飾り、祝詞や自らの祈願を唱え、カタックを掛け、ロンタ（風の馬）を飛ばし、布に経が印刷されているタルチョクをつける、といった行事を行う。仏教徒とボン教徒を問わず村の男性のみが参加して祀る。近年、ラプツェ祭の変化は極めて激しく、今までラプツェ祭で使われた鉄の矢、矛などは昨年から環境汚染の元と考え、全てを取り外して木材の矢などに変えられた。また、伝統的なジャラ（dgra lha,守護神）のハセ（dpa’ Zas,英雄の食）という行為もなくなっている。ジャラのハセ、つまりジャレハセ(dgra lha’i dpa’zas)とは、山神祭礼の時、村人全員が食うヒツジの肉である。

一頭の雌ヒツジを殺して、その心臓をアニェジュリの祠（ラプツェの奥）に捧げ、残りの肉を煮込んだ後、ラプツェ祭にきた村人全員に分配するのである。それをハセと呼び、人数が多い時でも必ず全員に足りるようにする。アニェジュリのハセを食すことによって、守護神であるアニェジュリが食べた人を守ってくれると信じられている。しかし、この伝統行事は仏教に

おける十悪の１つ殺生であるとして、最近ボンコル村の長老たちによって禁止されたという。驚いたことに、ボンコル村出身の化身ラマや学僧も仏塔の竣工式に参加する傍らラプツェ祭に参加し崇拝するなど、他地域の仏教社会ではほとんど見られない情景も見られた。仏教において信者は、仏・法・僧という三宝を拠り所とし、それに帰依するべきであるとされるが、山神など世間にさ迷う神々に帰依することは稀である。

他にラプツェ山まで未舗装の太い道路ができており、昔の馬や歩きでラプツェ祭にきた信者たちの姿が消え、車やバイクの交通手段が増えつつある。また、その道端には露店と屋台が出現し、軽トラックの荷台で雑貨品を売る店などを私的に経営している村人が増えた。

ボンコル村のラプツェ（山神アニェジュリ）のほかに、ボンコル村の１８ツォワの１つであるギャシュク・ツォワの人々が毎年 4 月 10 日に祭礼しているアマ・スメという女神のラプツェがあることを、今回初めて知った。（アマ・スメ神の調査は今後の課題）

今回のフィールド調査では、ラプツェ祭の一部始終やラプツェ山の周辺及びダム建設による黄河河岸の環境問題などについても詳細なフィールド調査を行った。雨季にダムが満水になり、河岸の畑が水没する状況を記録することができた。民間でラプツェ山の野生動物を保護する「ジュリ振興会（sgyo sgang yar skul tshogs pa）」、砂漠化に抗して植林をし、ボランティアとして祭後のゴミ片付けや村内ゴミを処分する「ボンコル村の環境保護会(ru gong ma’i ’khor srung mthun tshogs)」などの民間団体が設立され、環境保護や社会に対して様々な貢献をしていることも新たに知ったが、調査時間の制約により今度の調査課題とした。

写真 9,10 ボンコル村のラプツェ祭(報告者撮影)

表１このたび、報告者が参与観察したボンコル村の宗教的行事を表で示すと次の通りである。

日付	行事内容	参加者	場所
6 月 1 日	ラトン祭	村全員	ナトック
6 月 2 日～3 日	カーラチャクラ塔に仏塔建造	上の集団	牧地の上の集団
6 月 8 日	法の巡礼(チェーコル)	村全員	マニ堂
6 月 18 日	ボンコル村の仏塔建造	村全員	牧地・マポン
7 月 19 日	ラプツェ祭	村全員（男性のみ）	牧地

●学会発表について（発表を行った方のみ記入してください）

2018 年 9 月 3 日から 7 日にかけてロシアのサンクトペテルブルク大学を会場として開催された、第 5 回国際若手チベット学会（ISYT 2018）に参加した。

チベット学研究に関して国際的に強い影響をもつのは、国際チベット学会と今回参加した国際若手チベット学会である。両方とも 3 年ごとに開催されている。国際チベット学会はかなり大規模な学会であり、例年の参加者は 700～800 人に達すると言われるが、参加したことがないため、詳細なことは言えない。

今回参加した、国際若手チベット学会には 200 人の発表申請があり、そのうち約 80 人の若手チベット研究者の発表要旨が選考にかけられ、発表が採択された。第 1 回国際若手チベット学会は 2007 年にロンドンで開催され、2009 年にパリで第２回目が開催された。３回目は 2012 年に日本の神戸大学で開催され、4 回目は 2015 年にドイツで開催された。チベット学研究の最前線で活動している各国、各地域の若手研究者を初め、世界中の研究機関、大学、寺院などの研究者がサンクトペテルブルクに集まり、チベット仏教学、哲学、歴史学、言語学といった伝統的な人文科学のみならず、ボン教、社会学、文化人類学など多岐にわたる専門分野で学術的交流を行った。チベット自治区からきた研究者はいなかったが、チベット・アムド地域（青海、甘粛、四川）を中心とした地域歴史、現地調査、ボン教と仏教寺院の建築研究など実に多彩な発表があった。

写真 1 学会の集合写真（撮影者不明）

写真 2 セッションの様子（撮影者不明）

今回の学会では、報告者は 3 日目（9 月 5 日）のセッション 1 で Research on the Environmental Changes of the Yellow River Bank: A Case Study of Bon Skor Village というテーマで研究発表を行った。文化人類学に関する研究者のみならず、他分野の研究者が報告者の発表を聴講し、様々な観点から質疑や意見を頂いた。本国際学会での初の発表としては、上出来であった。

●本事業の実施によって得られた成果

総研大の学生派遣事業の援助を受けて報告者は、2ヶ月弱、中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村で行われているラプツェ祭及び山神祭のフィールド調査を実施した。山神の祭礼を巡って、ボンコル村の移住史やダムの建設、環境の問題などについて詳細なフィールド調査を行い、手薄であったデータを収集することができた。

第５回国際若手チベット学会（ISYT2018）（9月3日～7日）では、これまで行ってきた調査データの一部を研究報告し、中国国内外の人類学者、歴史研究者、ボン教研究者など多分野のチベット研究者から有益なアドバイスやコメントを得た。本学会において研究成果を発表することにより、報告者は自分の研究の不足点や欠点などを自覚できたと伴に、チベット研究に関する国際学界の様々な情報を交換することができ、議論を深化させることができた。

今後、本フィールド調査で獲得したデータの一部を分析・考察し、論文として『比較民俗研究』など査読付きの雑誌に投稿する予定である。

●本事業について

この度、総合研究大学院大学の海外学生派遣事業の援助を受けてフィールド調査と国際学会で成果発表ができたことに感謝の意を表す。フィールド調査を重視する文化人類学を専攻する学生にとって、現地調査や国際的な学会での研究発信などの研究活動は極めて重要である。本事業が非常に有益な事業であると確信し、今後とも継続されるようお願い申し上げたい。